

洋酒はなしのタネ

藤本義一
画・佐々木侃司

(1)

トリスバーの止まり木にチョコンとまつてハイボールやカクテルをたのしむとき、話のタネとしてもおもしろく、悪友をケムにまいたり、チョイと女のコをウナラせる洋酒の知識、しかもスマートな短かい話を、これから毎号続けてまいります。よろしく。

今月はまず「バー」について一席。この言葉、「棒」(BAR)という英語からきているのですがこれが「酒場」とどんな関係があるのか、ナゾ解きを始めましょう。バーへ入るとカウンターの前にスツール(足の高い椅子)に腰をかけ、足を一段と高い所にのっけてからオモムロに「マテニー」とかいいうわけですが、いまのバーはそのほとんどが、お客に足をふみはさせないよう気をつかって、この足のせ場を板張りやコンクリート塗りにしたり、スツールの下のほうに足をのせる台を取りつけたりしています。これは語原的

にいうと、棒でなければならぬのですが……

まだ交通が不便なアメリカの居酒屋は、西部劇でみかけるように客は馬や馬車に乗って酒を飲みに来たのでその馬をつなぐために酒場の前には高さ1mくらいの横木をしつらえてあったのです。そして、これが当時では酒場のシンボルとなっていました。

しかし開拓魂(フロンティア)に燃えたヤンキーは見事にこの片田舎のような街を発展させ、やがて鉄道が通り、自動車が行きかうようになると、この横木を持てあますようになってきたのです。とはいふものの、せっかく酒場のシンボルになっていたものだからというので、とにかくそれを店の中に持ち込んでしまいました。天井から吊るそうか、片隅に立てかけようかあれこれ考えたあげくハタとひざをたいて横たえたのがカウンターの下の横木です。「馬のかわりに人間をつなごう」という



魂胆。その名案が実を結んだかばみなさん、グラスを傾けながらトックリとお考えください。これが酒場のことをバーというようになったイキサツらしいのです。

お粗末。

マテニー (Martini Cocktail)

「カクテルの王様」といわれ、世界の人気No.1。最も古くから知られています。とくに辛党のかたに喜ばれ、ジンのシャープさ、ベルモットのホロニガさのミックスを冷たいタッチで味わえるのがマテニーのダイゴ味です。

ヘルメス・ジン

ヘルメス・フレンチベルモット

これだけを氷のカケラとともによくかきまぜ、カクテルグラスについで、最後にオリブ1コを底に沈めるとでき上ります。



マダム コンパンワ

飛 鳥 A S U K A

新生田筋の中ほどの路地を山手へ入ったところにある小さい店——外観は目立たないが、足を一歩なかに踏み入れると、クラシック調のくづれていないままに近代味がうまうま取入れられた洗練と明るさの交錯し融合した店構えに、マダムの趣味のほどがうかがえるような感じの店——これが「飛鳥」である。

このマダムは決して話し上手というほうではないが、お人柄の良さがしみじみとしのぼれて、心のくつろぎを感じさせるような話し相手である。

女の子までがマダムの薫陶を受けておつとりしている。

片隅では紅茶を啜りながら女の子と楽しそうに語り合っている客もいる——こんな雰囲気のお店だ。

バーテンの倉田氏までがしごく控え目だが、カクテルやオードブルを作らしたら彼の右に出る者が果して神戸に何人いるだろうと云はれるほどの腕前の持主であることを知っている人は少いだろう。すべてが控え目の、好感の持てる店だ。

マダムは作った美しさで人目を惹くようなことは大嫌いなたちで服装も、同じ洗練にしても粋き好みを避けた素人臭さを身につけ洋装のときもこの上もなく地味な好み、人間的な奥行きを深さをひときわ引立たせているようだ。

——こんなところにかえってこの人のゆかしい女らしさがにじみ出ているのかも知れないが……(W)



一店紹介

洋品雑貨 元町2丁目

サノヘ

伝統あるお店

昭和六年に開店いらいずっと「元町二丁目」で、伝統あるシニセを誇るシックなお店、お客さまも、落ちついた渋味のある中年層が多い。元町には六十年近く住んでらっしゃるといふご主人、佐野平吉氏(75)は、現在の雑貨業界では最古参者というが、いまでも元気に自らお店の陣頭指揮に当ってらっしゃる。日本人はなれのしたエキゾチックな風貌に、アカ抜けたセンスの良さがうかがわれるが、こうしたご主人の人柄が反映してか、お店の雰囲気はミナト神戸にふさわしく、エキゾチックなムード



(写真はエキゾチックな神戸のムードがあふれる店内)

ドがいっぱい。
奥行きのある十三坪の店内に美しく飾られたセーター、ネクタイ、ハンドバッグ、玩具など何百種類もの雑貨は、ほとんどが舶来品―欧州もの。アチラの特定の店と契約して仕入れてらっしゃるそうで、キホルダーなどの小さな品にもこのお店ならではのシャれたセンスがあって、楽しい気分にさせてくれる。

お客さまは、三代も続いているという固定したお客さまが多い。亡くなった古川ロッパさんが「親父さんたっしゃかね」とよく買ひ物にこられたとか。新珠三千代司葉子、岸恵子さんの女優陣を

はじめ、宝塚の生徒さんたちにも人気がある。お店を切りまわしてらっしゃる芦原マネージャーは、なかなかの勉強家、
「品物の置き方などを学ぼうと、この間香港まで行きましたが、店のスケールが大きいのには驚きました。」

私どもではたえず流行に気を使ひ、品物も流行に添うよう仕入れてますお客さまには、落着いて静かな雰囲気の中で面白い物していただけるようにと心がけてます。店を本通りを避け少し南を選んだのは自家用車が横づけできるようにと思ったからです」とお客さまへの細かい心づくしも忘れない。



波止場

細野 耕三
中 西 勝・画

神戸には地方紙が二つ、三大新聞の支局の他に経済専門紙の支局も二つある。土地柄、経済部の中に海運記者という特殊な呼び方をする新聞記者がいる。

経済部と社会部記者の混合したような性格で、港湾関係、船舶の動静や事件を担当している。私が阪神日報のサツ廻りから海運記者に廻わされたのは入社して六年目だった。海運記者を一度はする、といった事は阪神日報の習慣として出世コースにつながっていた。それだけに私は私なりに張切って、商船ビルの中にある海運記者クラブに、毎日通っていた。

雨の少い神戸では、そろそろ夏を思わせる六月の中旬その日も私は十時を廻ってから、海運記者クラブに顔をだした。

毎月のことだが、月の中ばは各商社が資金繰りの関係から荷積み控えるので、船舶の出入港も、まばらだし吾々も眼の色を変えて追うような事件はなかった。

「なにか、面白い話はないか」

私はシャツの襟を抜けて、風を入れながらK紙の記者に話しかけた。

「あれば、先週の週間誌なんか、読んでいられないね」「御説のとおり、じゃあへボ将棋でもさすかな」そんな

ことをつぶやきながら、投げだしてあったK新聞の綴込を取りあげた。K新聞は地方有力紙で、市内の事件は比較的、小さい事でも報道する。私は時間つぶしに、社会面を読みだした。

八船内事故で日雇人夫（アンコ）死亡Vそんな見だして港湾労働者が海岸共済病院で死亡した記事が五行ほど社会面の片隅に小さくのっていた。

私の視線がその記事を追っていた時、M新聞の若い記者が、「そうそう、青木さん、社会部の記者ならちよいと気になる話を聞いたんですよ」と云った。

私はめくりかけた手を止めた。

「ほー、話って」

「リンチを受けたアンコが共済病院で死んだそうです。

殺されたも同じだ、なんてアンコが喋ってましたがね」私は社会面の片隅にあった見だしの二倍活字が、ふいに六倍活字ぐらいの大きさに見えた。警察（サツ）廻りの記者のくせがまだ抜けていない私は、すぐ呆けるように「じゃあM新聞の社会部の仲間にお手柄させてあげれば」「それが、市内版にちよっと入らなかつたのですよ。支局は弱いですからね。早く本社に帰らないと、ドサ廻りで終っちゃうって、友達はやいていました。僕も本社

に戻りたいですよ」

「嘆くことはないさ、うちなんかM新聞の支局よりしほったいだぜ。ところで、その話、いつの事」

「詳しくは知らないのですが、殴られたのは一週間ぐらゐ前のような話でした」

「ふーん」

私は生返事をしながら余白の日付に視線を走らせた。

六月九日、一週間前だ。私の眼はきつと事件屋のように光っていたに違いない。だが、私は興味なさそうに

「もつとも、アンコ（日雇労働者）の話しあ、あんまり信用はおけないな。奴等ね、だいたい被害妄想だしさ。だから警察も簡単に調べて放りだしたんじゃないかな。

これが、背後関係に麻薬が絡んでいるとでもいうんならまた話は別だが」

「でも、うちの社会部の奴がききだしたのは検数協会のタリマンからでしたよ」

「それにしてもネタという程のものじゃあないよ。デスクが潰したのは無理ない。俺がデスクでも、没だよ」

「そうですかね、非人間的だな。新聞社の考え方って」

「どうしてだい」

「だって人が一人殺されたんですよ。アンコでも人間には変わりありません。もし、殺されたのが一般の社会人だったら、警察も新聞社も放っておかないでしょう」

私は黙っていた。私だって表面は興味の無いふりをしながら腹の中では、この事件を追う気になったのも「アンコだから、警察が簡単に調べて投げだした」という事に対する怒りに近い気持からだった。

「さてっと、何もなければお茶でも飲みに行ってくるかな」

「待てよ青木さん、この一盤終ったら一緒にでるから」
「彼女と逢引きさ。一緒にでられたんじゃあたまらないよ。お先に失礼」

私はできるだけ感付かれないように、記者クラブをでた。商船ビルをでると、海岸通りを、関西汽船の埠頭の

方に向った。共済病院は、関西汽船の埠頭の入口にあるぐづつきそうだった空が晴れた。強い陽射が照りつける臨港線の貨車が鐘を鳴らしながら喘ぐように追い抜いてゆく。私は日蔭で昼寝をしているアブレのアンコ達を横眼で見ながら次第に足が早くなった。何かある。何かあるに違いない。四十八時間ぶつとおして働かされたアンコ達のどす黒い顔を見ながら歩いて行くうちに、私の予感はあるんだ。現実性を帯びてきた。

共済病院は労災保険が日雇労働者にも適用されるようになってから、新しく建てられた港湾労働者専用の病院である、中にはいると、外観のスマートさは、おおよそ縁遠い患者ばかりがいる。どの顔も疲れ切って呆にしたように虚ろな眼をしている。

外科の受付で、私は新聞社の名がはいっている名刺をだして、事務員に来訪の理由を云った。

「四月十三日、こちらで死亡しました吉田守夫というアンコ、日雇労働者ですね。その吉田についてちよつとお伺いしたいのですが」

事務員は外来患者名簿の綴込みをめくって「吉田守夫十三日ですね」

といいながら私の顔色を上眼づかいに何度も見た。

「四月十三日、ありませんね」

「じゃあ、十二日を見て下さい」

事務員は面倒臭さそうに、また綴込みをめくった。

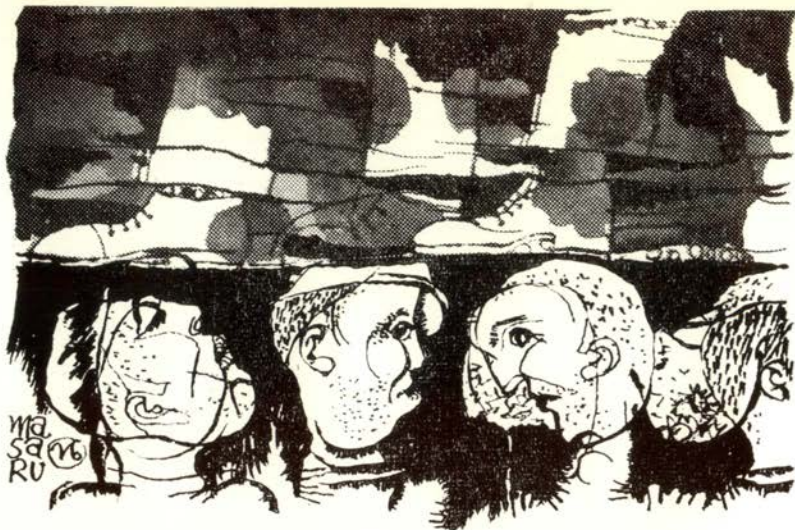
「吉田守夫、それです」私は受付の窓から首を突込むようにしてゆびさした。

「十二日夕刻入院、成程、吉田守夫二十九才、外傷ですね」

事務員は私の要求に困惑の色を浮かべながらそばの看護婦に「君、この方が外科の山本先生に面会したいそうだから、山本先生を呼んで」と私の名刺を渡した。

私は応接室と書いた小さな部屋で待たされた。いらいらして、煙草を続けて吸った。

八担当医師の最初の顔色読むことだ。医者は死人に慣



「御立会になったのは、山本先生だけですか」

「そうです」

「本人を連れてきたのは誰でしょうか」

「荷役会社の小頭ですが、荷役事故だといっておりました。この病院に担ぎ込まれる患者はたいいてい荷役中の事故です。船のハッチ蓋が落ちて当たったとか、荷役用デレックのワイヤーが切れてそれに巻かれたとか」

「つまり外傷に特別の特長は認められない、いや疑う余地はなかったというわけですか」

私はたまたみ込んだが、医師は「そうですね、なんと云っても場所柄ですから、特につて考えませんでした」

「なるほど、いや、どうも失礼いたしましたね」

「そうですか、お役に立ちませんでしたね」
私は共済病院をでた。結局のところ担当医師からは何も掴めなかったが、吉田を担ぎ込んできたのがK運輸の荷役監督と小頭の二人であるという事が判った。

神戸港の港湾荷役は、船会社に直結する三井、三菱、川西倉庫の三業者があり、この下に六次元請荷役会社がある。K運輸は六次元請会社の一つである。元請会社の下に二次下請荷役業者がいる。常雇労働者を五十名前後を持つ中資産の会社組織である。二次下請業者の数は六十一社、この下に三次下請業者があり、この数は二百四十数、三次下請業者は個人会社であり、親分、子分の関係で結ばれている。したがって従業員と称する常雇労働者も七、八人から二十名どまりである。更にこの三次下請業者に入出入する手配師と称する人入れ業者がおり、手配師が日雇労働者の就業あっせんを行っている。

しかも、三大倉庫から手配師に至るまでの縦の系列は本家、分家、兄弟と呼ぶ前近代的な従属関係にある。三大倉庫と六次元請会社は、経営の危険分散を口実にして従業員を減らし、下請業者に荷役を請負わせるのである

だから、倉庫出し入れ貨物運賃が一屯あたり三百六十円

とすると、三次下た業者はトン当百七十円で仕事をして

いる。ここに完全な労働搾取があることは公然の事実だ

「脳内出血です」

手配師は三次下請会社の小頭という荷役係からアンコの集配を命じられ、人数を三ノ宮駅前の広場や辨天浜あたりで浮浪者と紙一重の連中を集めてきて作業現場に送り込む。だからアンコ達は自分達の労働賃金が幾らであるかという事さえ知らない。いわゆるドンブリ勘定と称して、手配師にまとめて与えられた賃金から手配師が世話を差引き、残額を等分する方式である。

このような労働体系は、終戦後、GHQの港湾労働に関するコンファレンス・メモによって禁止されたのだったが、二十五年の朝鮮戦争によって、急に増大した戦時物資の荷役量をさばくために、再び復活してしまった。勿論、米軍港湾司令部がオリエンタルホテルから引揚げた後も、この体系は港湾労働の必要悪といった形で残され、現在に至っている。

その程度の事は私も海運記者の常識で知っていた。だが、下請業者、とくに二次下請業者と元請業者の勢力が神戸港を中心とした市政にまで浸透していた事は想像できなかつた。公衆電話が眼にはいつた。

私はM新聞の若い記者が検数協会からアンコ死亡を確認したという事を思い出した。△そうだ、十二日に荷役があつたK運輸関係で死亡がでるほどの事故があつたか



PINK CORNER

あなたはどんな楽器がお好きですか。バイオリン？チエロ？コントラバス？ギター？バンジヨウ？マンドリン？バスト、ウエスト、ヒップという「三段とび」の曲線では「バイオリン型」まさるものはありません。ただし、

どうか先に洗っておくべきだ。K運輸に行ったところで組の者が喋るわけはないんだし、と思った。

元請から三次下請業者、手配師にまで及ぶ従属関係は、業者が相互に隠し合っている。動員荷役能力が明確になると、月末月始めの忙繁時に於ける仕事の量が船会社や倉庫業者によって配分される心配があるからだ。波止場ではクイックデスパッチ（早荷役短時間出港）は総ての事に優先して考えられている。法よりも人間の生命よりもクイックデスパッチは大切なのだ。これが港に起る事件の最大の原因になっていることは勿論である。私は電話機のダイヤルを廻しながら、私がつけている範囲から想像できる波止場の機構を考えた。

—以下次号—

そのサイズが問題です。キング・サイズ時代にはコントラバスのボリュウムが愛されました。その時代の「名器」としてフランス製の「マリナ・ウラディ」をあげる事ができます。ところが、トランジスター時代になってから見直されてきたのが、他の小型楽器です。『膝にバンジョー』という歌もあるくらいですから、何よりも『膝に抱ける』というのが最大の強味でしょう。ことにマンドリンのふくらみ加減といったら、いくらな

でまわしてもあきることがあります。短調

せん。ときにはボンボンと軽くだたいてみたくもなります。キミ、キミ、いったいマンドリンというのは「弦楽器」なのかね。それとも「打楽器」なのかね。コントラバスやマンドリンが「弦楽器」なのか「打楽器」なのかは、むづかしい問題です。ここでご注意が肝心なのは、ツボを押しまちがえると「管楽器」にもなることです。流れでる調べは「へ

(T)



PINK CORNER

—センセイ、私のこどもは絵を描くといつも太陽を二つも描いて困るんですが。

先生「それはご心配でしょう。とにかく世界が二つの陣営に分わっていたり、正義も平和もみんな二つずつありますから、太陽が二つ

に見えても仕方がないかもしれません」

—センセイ、私のこどもは太陽を紫色に描くんですが、心配はないでしょうか。

先生「太陽は『父』の表徴です。

奥さんのほうが強く、ご主人のほうに紫色の打ち身やダボク傷の絶えまがないと、紫色の太陽を描かれても文句がいえないかもわかりません」

—センセイ、私のこどもは太陽を黄色に描いてしまふんですが：

先生「これは何も心配はありません。むしろ健康な証拠です。かくも申すソレガシも、若いころは情熱がありあまって、一晩に五回や六回ぐらいいの『強行軍』をやったものです。おかげで、翌日の朝はテキメンに、お天道さまが黄色く見えました。それくらい情熱を発見させておくと、もう当分は悪いことを考えなくなります、不良化防止にもなりますなあ」

—センセイ、私のこどもはまだ八歳なんですが。

(T)

△神戸子っ案内▽

・原稿・カットをお寄せ下さい。

次号から読者の頁をつくりたいと思います。神戸子っの声をお寄せ下さい。明かるい話、ユーモラスな話題がほしいものです。

原稿は四〇〇字まで、住所、氏名、職業、年令を明記のこと、カ

ットはグント紙に墨書き、ハガキ宛大です。宛先、「編集室」

・神戸の香りをふんだんに、そしてスマートにもりこんだ、神戸子っを皆様のお友達にプレゼントして上げて下さい。

神戸を離れて勉強している友達に、仕事で頑張っている友達に神戸子っを送って上げて下さい。き

っと喜んでいただけます。送り先を明記して編集室にお申込み下さい。

・会費 六ヶ月分 五〇〇円。

(送料共)です

編集室 神戸市荻合区

御幸通8丁目9の1

神戸国際会館一階

TEL②七〇三七



THE SECOND COVER

KOBEの北野町あたりにはあっと驚ろくような神戸っ娘が黒い髪を春風になぶらせながら坂道を散歩している……

表紙の女性…太田和子さんは松陰短大をこの春卒業、生粋の神戸育ち……趣味はボウーとしている事。東洋的な美くしさは、神秘的な魅力がある。背景は新しく重要文化財に指定された異人館……

撮影 衣川宏

4月号の発行に色々とお世話いただいた方々

青木重雄 岡崎正一 榎並ツトム 大淵英夫 小川芳夫 小林喜楽 古路孝巖 塩路孝二 滝井勝七 田村孝之介 永井達夫 中西政勝 芳賀高男 宮裏二

編集後記

各方面からのご声援に勇気づけられてスタートした「神戸っ子」の創刊3月号は、ますますのご好評をいただき、編集室一同ホッとしています。

毎日（12日朝刊）、朝日（13日朝刊）、兵庫（16日夕刊）、神戸（18日夕刊）などの各新聞紙上にも紹介していただきました。またたくさん読者からお問合わせの手紙や、電話もありました。なかには遠く大阪からお電話くださった方もあり、みんな最高に感激しています。

創刊号に編集室の電話番号②7037を記載するのをすっかり忘れ読者のみなさんに大へんご迷惑をおかけしましたことを深くおわ

びいたします。

本号から「神戸っ子」の読み物として司馬遼太郎氏の「ここに神戸がある」と、細野耕三氏の「波止場」が連載されることになりました。司馬氏は毎月神戸を歩いて新しい角度から「神戸印象記」といったものを書いてくださることになっています。ご期待ください「神戸っ子」という名前が話題になりました。「江戸っ子よりイカスよ」「いいじゃないの響きが」と喜んでいただいています。なかには「神戸っ子？、あれは君、ガラが悪いよ」なんて、ワザと逆らう、アマノジャクなお方もありました。さてみなさんは、どちらを支持してくださいますか。



月刊

神戸っ子4月号のスポンサー

(ページ順)

兵庫いすずモーターK・K	表1
北村真珠K・K	2
元町バザール	2
風月堂	11
柴田音吉洋服店	11
御木本真珠K・K	12
竹馬産業K・K	12
兵庫ジャイアントK・K	17
大黒正栄	17
伊藤栄餐食品K・K	17
キヨシマ屋	23
洋菓子のヒロタ	23
三条電機商会	24
田嶋真珠K・K	28
永田良介商店	28
国際コンタクトレンズ研究所	28
シラサ	34
イクシマヤ	34
タジマ	35
千秋堂	35
千秋堂	35
トーレイ洋装店	35
つばや	35
マキシン	36
神戸屋	36
フナキヤ	36
スギヤ	36
神戸シヤツ	37
マルヤ靴店	37
太田ベツ甲店	37
エスター・ニュートン	37
サノヘ	38
三恵洋服店	38
マーキユリー	39
竹田装飾	39
長崎堂本店	39
元町電機	39
神戸トヨベツト自動車K・K	表3
兵庫トヨタ自動車K・K	表4



●ニューコロナが当る！



神戸トヨペット

5周年謝恩セール

ニューコロナと家庭電化製品が
当る豪華なプレゼント、明日の
くらしに夢を生む抽せん券がお
求めの新車（ニューコロナ・マ
スターライン・トヨエース）に
もれなくついております。

〇期間

昭和36年2月15日より
昭和36年5月15日まで

〇賞品

特賞（一名様）

ニューコロナ乗用車

一等（五名様）

NRR-OOS型電気冷蔵庫又は
HEI-63型ステレオアンサンプル

二等（二〇名様）

SS式N24型電気洗濯機又は
HE32型ステレオアンサンプル

三等（六〇名様）

MC315P型電気掃除機又は
T-70型トランジスタラジオ

記念品（もれなく贈呈）

キャッスルエンジンオイル
18リットル罐

〇発表

昭和36年6月10日神戸新聞紙上

神戸トヨペット株式会社

本社

神戸市兵庫区水木通2

尼崎営業所

TEL代表⑥四一四一

姫路営業所

TEL④二四五六
姫路市総社本町68
TEL姫路二二六九

月刊「神戸っ子」4月号

発行所／神戸市葺合区御幸通八丁目九ノ一
昭和二十六年四月五日 発行 毎月一回

神戸国際会館一階
編集／五十嵐恭子

TEL(2)七〇三七 頒価七〇円
発行／小泉康夫 (送料8円)



CROWN

*神戸っ子歌手*木田ヨシ子さん(ピクチャー)

ご愛車は61年式トヨベット・クラウン・デラックス

兵庫トヨタ自動車株式会社

本社・工場	電話(大代表)⑥	5051
中古車センター	電話(代表)⑤	1236
尼崎営業所	電話(代表)④⑧	9401
姫路営業所	電話	874・4147・6478